

北平奉天故宮所藏の蒙古源流に就いて

併せて故内藤博士遺業の一斑に就いて

鴛 淵

一

○ 昨夏獨逸のヘーニシユ博士が滿文蒙古源流を羅馬字譯して、それに序文と簡單な註とを附して出版された事は余等滿蒙學徒にとつて眞に喜びにたへぬ所である。而して右著書の原本となつたのは、北平故宮所藏の刊本滿文蒙古源流であつて、其の藍寫眞によつて成されたものに外ならない。この書の序文によれば、ヘーニシユ博士は其の藍寫眞を手にするを得て非常に喜ぶと同時に、明かに滿文の刊本と同時に出版されたであらう所の蒙文の蒙古源流が見得られぬ事に對して遺憾の意を表して居られるのを知り得る。これは眞に無理からぬ話で、同情にたへないが、右の滿文刊本を手に入れて直に之を字譯印

行された努力に對して深く敬意を表する次第である。但し余個人としての慾を言へば、滿洲文字のまゝに印行された方がよかつたと思ふのであるが、之は種々の事情あつて已むを得なかつた事と察するのである。然るに我が日本では、ヘーニシユ博士が目睹の機會なく遺憾とされた所の蒙文刊本の蒙古源流が、同じく滿文刊本と共に、早く將來されて研究の資に供されて居つた。それは外でもない、故内藤博士が明治三十八年と三十九年とに奉天宮殿に於て多大の勞苦を拂つてとられた所の右二書の藍寫眞で、現に山城恭仁山莊に珍藏されて居るものである。この滿蒙兩文の刊本といふのは、乾隆殿板であつて、右二書の藏せられた奉天宮殿内の七間樓には、同じ殿板の

漢譯蒙古源流もあり、其他珍籍が藏せられて居つた。尙七間樓には右の滿文蒙文の蒙古源流は各々二部有つたと云ふ事であるが、(昭和四年八月發行藝文第二十一年八號所載、奉天宮殿書庫書目參照) 現在その一部は行衛を失し、残りの一部は移されて滿洲國立圖書館に藏せられて居る。蓋し奉天と北京との宮殿には同一殿板の蒙古源流を數部置いたと思はれるのであつて、今回ヘーニシユ博士の著書の原本となつた北平故宮の滿文刊本蒙古源流は、この奉天の滿文刊本と同板である。

○

さてヘーニシユ博士の新著を入手するや、故内藤博士は從來の研究上の關係よりして、余に新著の序文を譯讀せん事を命ぜられたので、余は淺學をかへりみず、譯讀の上、その譯文を博士に呈したのであつた。これは故博士が右の序文に言つてある事に就いて、異見ある所を述べてこれが紹介旁批評をなし、又併せて蒙古源流全般に關して述ぶる所あらんと考で居られたからである。既に一言したやうに、故博士が蒙古源流に關して、或は藍寫眞をとり、又殿本と鈔本の存在を知り、漢譯文の校

合をなして、これが研究に志されてより、三十年を経過したが、我國に於て特に之に就いて研究發表をなすものなく、却つてヘーニシユ博士の新著印行となつた爲に、茲に再び自己の往年の勞苦を想起し、蒙古源流に對する關心研究の早かつた事を述べ、併せて我國の學徒を警醒せんと考へられたに外ならないのである。其點について常に藍寫眞を借覽して研究に資するを得、又その藍寫眞作製に關して苦勞された逸事を傳聞して居る余として、故博士の心情を推察すると共に、自身の不勉強に冷汗を覺えて慚愧にたへなかつた。然し今や博士が、かゝる意思を表はされた事は、學界の爲慶すべき事であつたので其の指示により其の意を承けて一文を草し、可及的速かに發表せんと考へて居つた。所が昨秋、故博士は病軀を推して渡滿後、公私共に忙しく、且藥餌に親しまるゝ事多く、余亦常に側近に侍するを得ずして、遂にその指示を受けるを得ず、明けて今年に入るや、博士の病勢は一段と惡化された爲に、更に其機會を失して荏苒日を過すまゝに、四月となり五月となり、突然の發作は不幸にも

六月末の最悪の日を迎へねばならなくなつてしまつたのであつた。眞に千載の遺恨であると共に、余の怠慢により、遂に其事を實現せしむるに至らなかつた事を學界に對し、衷心懺悔しお詫びする次第である。

右様の次第で、故内藤博士の蒙古源流に關して纏つた御意見や、ヘーニシユ博士の新著に對する御批評は直接承る事を得なかつたが、年來斷片的ながら承る所あり、又余として昨秋以來決して之に就いて全然等閑に附して居たのでもなく、多少とも研究調査する所があつたので不十分ながら調査の結果の一部として蒙古源流の鈔本殿本の現存状態に就いて分明になつた所を記し、以て一は故博士の靈に告げて報告すると共に、余の怠慢をお詫びし、一は之を機に學界に紹介して、以て些さか追悼の意を表したいと思ふ。

○

余が本稿を草する所以のものは右述の通りであるが、尙それを記すに先つて、少し余白を頂戴して、故内藤博士が蒙古源流の藍寫眞を得られた苦心に併せて、故博士

と滿洲との關係の如何に深つたかに就いて少しく述べて故博士の偉業の一端を偲ぶよすがにしたいと思ふ。

故内藤博士と滿洲との關係は非常に早い以前から開かれ、而して最後迄密接な關係が有つたのである。故博士は夙に滿洲の歴史の研究に着眼し、就中特に清朝の歴史掌故に非常な興味を持つて、之を研究の對象とされたのであつた。故に其の滿洲に對する學識識見は早くから世に現はれ、其の識見の公的に發しては或は大坂朝日新聞の論説となつて世人を指導し、或は外務省囑託として日露役の滿洲軍占領地行政調査となり、又間島問題資料蒐集となりて政治的問題解決に多大の貢獻をなしたのであつた。然し故博士の學界に残された功績はこれ以上に多大なもので、滿洲發達史、清朝發祥史の研究が基調となつて、滿洲關係の貴重な資料文獻の夥しい蒐集となつたのである。かの明治三十五年を初回とする前後數回に及ぶ滿洲旅行は、即ちこの公私に亘る滿洲との關係を緊密ならしめ、その學術的研究をより深甚ならしめた重大な意味を有つものであつて、其間前人未踏地の大旅行

(明治四十一年八月より九月にかけて、)をなし、從來知られ(會寧間島より吉林に赴かれた旅行)なかつた無數の貴重な史料の大收穫をなし、研究上幾多の業績發明となり、遂に今日に及んだのであつた。今、事多岐に亘るので清朝發祥に關して發明する所多大であつた旅行に關しての興味ある事柄は便宜上省略に附して、研究上多大の功績を齎された所の資料文献の蒐集獲得に限つて、次に少しく述べてその全貌を想像する事にした。

かの明治三十八年六月、外務省より滿洲軍占領地行政調査の囑託をうけて同地方を視察されたのは、同時に學術的功績の第一階梯をなすものであつた。その公的使命の如何に重大であつたかは、其の視察中、北京に在つた小村全權大使の招電により北京に赴かれた事を舉れば事足りるであらう。而して學術的功業は更に偉大なものがあつたのである。この時の旅行は現に臺北地方法院長勅任判事として令名高い大里武八郎氏を隨伴されたものであつたが、暑熱を冒して渡滿後公的調査をなす傍ら、清朝の歴史掌故關係の資料を續々と集められた。例へば八

北平奉天故宮所藏の蒙古源流に就いて

月十九日には清朝の祭天祭祀の道場である堂子廟(現在奉天東邊門外に其遺址)を奉天東郊に見學して大に得る所あり、(舊遺少)八月二十七日には奉天宮殿内の崇禔閣に於て清初史實の究明に大切な漢文舊檔を發見し、更に清朝實錄及び太祖實錄戰圖を觀て發明さるゝ所あつた。次いで三十日にも同じく之を觀、又敬典閣に清朝の玉牒を觀られたが、十月に至つて宮殿内の七間樓を開いて幾多の書冊を披閱されたのであつた。此の七間樓所藏の書目に就いては現存目を嘗て藝文昭和四年八月(八號)の附録として載せられたが、これだけの書冊の存在を明らかにしたのは前後に其人なく、時の總督趙爾巽を驚嘆させた事を想ひ、及び現在はその半數に減じた由を知る時、轉、感慨にたへぬ次第である。而も其中に蒙古源流殿本の在る事を知られたのは貴重な發見であつて、滿蒙漢三文の中蒙文のもので、當時偶々別箇の視察調査に來遊された伊東忠太博士の隨行者である大熊工學士を煩はして藍寫真に撮り、初めて日本に將來されるに至つた。かくて宮殿内に於ける資料文献調査の傍ら、或は清朝發祥地である興京

(黑圖阿喇又)を訪れ、永陵に謁し、又奉天郊外の福陵(東) (赫圖阿拉)に太祖太宗の英靈を弔し、黃寺を訪れては蒙古

昭陵(北)に太祖太宗の英靈を弔し、黃寺を訪れては蒙古大藏經を發見し(後間もなく東京帝大に將、又喇嘛教の風

(來。關東震災の時焼失)

習を具に視、各地に史跡を訪ねて東奔西走、席あたゝまる暇すら有たれなかつた。かくして此の數月に亘る旅行中、大里氏の手により撮影された所の得難い寫眞は百二十枚の中百枚を選択して一冊の「滿洲寫眞帖」となし、明治三十九年七月の序文附にて、明治四十一年六月上梓されたのである。尙この寫眞帖は、昨年其後の寫眞を補つて改版上梓する事として略々工を了へて居るので、近く余等遺志によつて乍不及その解説を加へて世に出す計劃である事を茲に附言しておき度い。

かくて此年の滿洲旅行は非常な功績を收めて終了されたが、更に翌年には再び命を受けて渡滿、前回に劣らぬ成果を齎らされたのであつた。即ち明治三十九年七月、博士は多年編輯に従ひ正論を以て世人を指導する所あつた大阪朝日新聞社を退くや再び外務省の囑託を受け韓國滿洲各地を視察された。今次の旅行は一には公的使命と

して朝鮮と支那との間に多年の懸案であつた間島問題に關する資料蒐集、並に其の調査にあつた。間島は元來清初滿洲族の發展に伴ひ、この地方より住民を興京、奉天に移居せしめた留守に乗じて、朝鮮人が移住占據した土地で、其所屬如何は解決困難な政治的問題となり、康熙年間以來屢々くりかへされた兩國間の外交問題の一つであつた。従つて故博士は專攻學問の立場からして、朝鮮統監府に於て朝鮮側の記録文獻に就いて調査された後、滿洲に入り實地に就いて究められる所があつた。その際九月五日に奉天宮殿内で、長白山圖一葉を發見されたのである。長白山(白頭山)は言ふ迄もなく、清朝發祥傳説のかゝる所の山であり、古來滿洲民族の崇拜した靈峰であると共に、間島問題に關聯して兩國間にやかましかつた豆滿江の發源する處として、緣由淺からぬ山である。故に前述の使命を帯びた旅行の途次、右の如き地圖を觀られた事は、故博士として眞に不思議な縁と言ふべきであるが、この問題をはなれて、地圖そのものに就いても亦別の興味がある。それは、この地圖の製作が西洋宣教

師の力によつて作られたものの一でありや否やは別として、地名を滿洲文字で記入してある事であつて、山川野澤都邑の名稱の正しい訓み方を知り得るのは滿洲の歴史地理の研究上甚だ有益な事と言はねばならない。其の大幅の圖を苦心の末に撮影された事は、眞に學界の珍とする所であり、且今日この原圖の行衛を失して居る如く思はれる點からしても、眞に意義ある事と言ふべきである。

次で十月五日には奉天宮殿前の十面石經幢を拓して開元の年號と瀋州の文字とを發見されたが、これが又興味ある碑拓である。碑銘そのものは、龔勝陀羅尼に過ぎないが、開元二年の日附は唐玄宗時代のものである事を語り、瀋州は奉天の古名で、その頃既に瀋州と呼んで居つた事が知られると云ふのである。而も開元二年といへば既に渤海國が唐朝より認められて存立した時であり、奉天の地は或は渤海國の所領に歸して居つたと解せられる所からして、この十面石は或は渤海國の遺物、文化の記念物でなからうかと云ふ點に於て學界の注目をひく事多大であつた。若し果して渤海國の遺物とすれば、甚だ興

味有る事であるが、よしんば左様でないにしても、滿洲に於ける文化の古き記念物の一として確に注目し値するものと言つて差支ない次第である。更に十月十八日に及んでは、前年開庫して發見する所多大であつた宮殿内の七間樓に再び到つて、刊本の滿文、漢文蒙古源流、西域圖志及び舊清語等を借用し、二十日から二十五日迄の六日間に滿文蒙古源流、西域圖志、舊清語等を藍寫眞に撮られたのであつた。元來今次の旅行には前記大里氏と現朝鮮史編修會の修史官として滿鮮史の權威たる稻葉君山博士との二氏が隨伴されたのであつて、右藍寫眞の撮得には二氏の獻身的努力が預つて力有つたのである。嘗て故博士自身の語られた所によれば、藍寫眞用の枠を十四个作り、稻葉氏は紙の挿み役となり、大里氏は洗ひ役となつて活動されたが、何分晝間の時の短い滿洲の秋では、朝十時半から午後一時半迄しか働く事が出来ず、一日僅か三時間の勞働であつたが、兩氏の協力により一日に三四百枚の藍寫眞をとり、僅々六日間に幾多の珍籍を撮寫し得た」と言ふ事であつて、眞に人力の容易に企て及

ぶ事の出来ない事をやり遂げられたものといつても過言でない。かくて前年に蒙文、今年に滿文の刊本蒙古源流は、大なる勞苦の末に遂にその藍寫眞が我日本に將來され、斯界の研究に大光明を與ふる事になつたのである。これは今當面の問題である蒙古源流に就いてのみ記したのであるが、他の珍籍の研究上に與へた功果に就いても同様であることは、無論言ふ迄もないのである。かくの如く地圖、碑文、珍籍の撮寫磨拓に従事さる、傍ら、故内藤博士の調査の手は四庫全書に及び、文溯閣の鈔本漢文の蒙古源流を借用し、先に借用された七間樓内の刊本漢文蒙古源流と共に、坊刻本蒙古源流を校合された事は余等後進として限りない喜びであり、深甚の謝意を表する所である。

以上の外、尙調査研究は多數あつたが、要するに明治三十九年の旅行は、前年に優るとも劣らぬ大收穫を以て終了し、同年十一月歸朝されたが、茲に到つて故博士の滿洲に關する識見學識は凡ゆる點に於て第一人者たる地步を獲得され、事滿洲に關しては何人も故博士に諮らざ

るを得なくなつたのであつた。かくて明治四十年秋京都帝國大學に招かれて講師となり、愈々學究としての生活に入る事となられ、同四十二年秋には教授に任ぜられて東洋史學第一講座を擔任さるゝに至つた。京都帝國大學の東洋史學が東京大學に比して別個の輝かしい新學風を有つに至つたのは、一に故博士に負ふ所大である事は言はずもがなの事と思ふ。

○

次に明治四十三年七月命を受けて渡支されたが、これは北京に將來された敦煌資料の調査の爲であつて、滿洲には關係なかつたが、明治四十五年二月末、命を受けて渡滿された時は、再々大功績を挙げられたのであつた。

此時は羽田富岡兩先生と共に奉天に赴き、宮殿崇禎閣内の滿文老檔と五體清文鑑とを影寫されたのである。この兩書が研究資料として如何に大なる價值あるかは今日周知の事であつて、今更贅言を要しないが、序を以て一言しておき度い。滿文老檔は明萬曆三十五年丁未の年に始り崇禎九年即ち清太宗崇德元年に及ぶ三十年間の滿洲文で

書かれた清朝の古記録で、清の太祖太宗二代の史實を記したものである。嘗て故博士は藝文第三編第十二號(大正元年)に「清朝開國期の史料」といふ一文を載せてこの書を紹介された中に、「太祖と殆ど同時代なる我が徳川家康公に、これだけの記録が備はつて居らうか。女眞の夷種から勃興した汗のやつた事としては、實に見上げたものといはねばならぬ云々」と言はれたが、眞に滿洲族の清太祖太宗時代の記録としては詳密なものであつて、太祖の分は十套八十一冊、太宗の分は十六套九十九冊、葉數にして計四千餘に及ぶ珍重なものである。而してこれが太祖太宗實錄の材料となつた事は疑ないが、漢文の太祖實錄を之に比する時、その記事に於て實錄に見られないものが多々あり、而も太祖等の愛親覺羅氏宗室の内事に關してかゝる事の往々認められる事は、又以て老檔の内容の貴重なる所以を示すに足るのであつて、當時の記録として眞に忠實なものと言はねばならぬ。但し老檔には二種あり、初めは無圈點文字(舊滿洲字)で記され、後に加圈點文字(新滿洲字)で書き改められたと思はれるが、(太宗の天聰六年以後加圈點)

北平奉天故宮所藏の蒙古源流に就いて

文字を用ふ。従つてこれより後、加圈點文字(舊滿洲字)で書き、更に乾隆帝の時全部を加圈點文字に改む)奉天に在るの加圈點文字の方であつて、無圈點文字のものではない。従つて後に書き改めた時、既に原檔を失し、又鼠嚙蝕にかゝつて不明になつた爲、往々原檔殘缺と貼紙のした所がある。故に前記三十年間の記録とはいへ、其間數年數月缺けて居る所のあるのは、本來無かつたか、或は右の事情によつて生じた事であらう。何れにせよ、清初に關して、これだけ揃つた記録が、奉天に存した事は往年發見の漢文舊檔と共に珍中の珍とするに足りるのであつて、茲に故博士が新進の學者と共にその全部を影寫された事は我學界の爲に眞に慶すべく又深謝すべき事であつた。又五體清文鑑は勅命によつて清朝領土内に行はれて居た言葉を集録編纂した辭典である。初め滿文のみものが作られ、次に滿漢二體、滿蒙漢三體、滿蒙漢藏四體となり、最後に乾隆帝の時、滿蒙藏回漢の五體となつたが、其四體迄は印行され、五體のものは遂に印行されず、奉天と北京とに一部宛藏されたのである。従つて最も後出の五體のものが、最も廣範圍に亘つて居るだけ

に最も有益であり、印行されないだけに目眩し難つたがこの清朝全盛期の乾隆帝の得意な著作であり、事實清朝勢力の廣大を示すに足る記念物を苦心の末撮影された事は、亦喜べき大業であり、滿洲語その他の研究に役立つ事多大なる言ふ迄もない。かゝる意味に於てこの有益有價値な二書を影寫された事は、故博士としても最も満足に思はれた事と察するのであつて、茲に後進の一人として、故博士並に羽田富岡兩先生の勢に對し滿脣の謝意を表する次第である。かくて明治四十五年春に於ける滿洲旅行は、再びするを得ぬ大功績を收めて歸朝され、故博士と滿洲とは愈々密接な關係に結ばれて來たのであつた。

○ 其後故博士と滿洲との關係は如何であつたかといふに大正六年秋、支那へ出張された際、或は往返何れかに滿洲を通過されたかとも思はれ、又七年十月には滿鐵の招聘により講演の爲渡滿されたが、この際は前述の如き資料文獻の特別の入手發見の事はなかつたやうに思はれる。然し滿洲に對する關心は愈々深く、大學に於ける講義

に或は講演に、新聞雜誌の寄稿論文に、滿洲關係の諸問題を扱はれた事は申す迄もなかつた。思ふに故博士はこの頃から持病の膽石病に罹まされ、遂に大正十二年には大手術をうけて辛うじて生命をとりとめられた位であつたから、従前の如き無理な調査研究旅行も控へられ勝となり、心ならずも家居さるゝに至つたと考へられる。大正十三年には歐洲に訪書の旅をされたが、之は病後の御無理な旅行であつたとは云へ、明治時代の滿洲旅行に比べては、はるかに苦勞の度は少なくなつた事と推察して居る。従つてこの頃滿洲に赴いて直接かの地で活動される事は殆んど其機會がなかつた譯である。ところが昨秋に至つて周圍の形勢は如何しても博士の出慮を煩はざるを得なくなつて、病を推して渡滿さるゝに至つた。それは外でもない日滿文化協會成立の爲である。一昨年春三月滿洲國の成立後、日滿兩國の提携は凡ゆる方面に愈々親密を加へて來たが、その文化的方面の提携開發は未だしの感があつた。其時兩國識者より期せずして文化的提携の事提唱され、遂に我國から數名の權威者が滿洲に赴

く事になつたが、この際内藤博士が渡滿して、その業に當らるべきは、従前の關係に照して必然的事であつたと思ふ。然し當時博士は病褥に在り、醫師は多大の懸念を有したが、斷然決意し悲壯な覺悟を以て渡滿される事になつた。故博士の滿洲に對する關心の、如何に深く、如何に大であるか、以て伺ひ知るべきである。かくて十月十一日神戸出帆、大連に向ひ、旅順に羅叔言先生と會談し、奉天に宮殿圖書館、堂子廟址を訪れ、又張學良の逆産を閲して十六日新京着、十七日から三日間に亘り鄭蘇戡、羅叔言諸氏と胸襟を開いて文化提携を議し、遂に文化協會の成立といふ成果を齎したのであつた。この三日間の會議に於て故博士が滿洲、支那に關する該博な智識と正鵠を得た識見とを以て終始會議を指導して成果を收められた事は、其席に連るもの、均しく目睹した所であり、又幸にして博士に隨伴して渡滿するを得た余の親しく觀た所である。十月二十日出發歸途に就かれんとして、博士は疲勞の爲、突然の發作發熱あり、一時心を痛められたが、幸にして快癒、二日延引しただけで二十二

日出發大連に至り、二十三日出帆、其後は無恙歸國されたのであつた。而して愈々協會が正式に成立して事を始むるや、博士は選ばれて日本側の常任理事となり、滿洲側の常任理事羅叔言先生と協力して協會の發展に意を致し、其指導者たる位置に立ち銳意劃策されたのであつたが、事漸く其緒に就くや否や、俄かに道山に歸せられた事は協會の爲、延いて日滿兩國學界の爲痛惜に堪へぬ次第である。尙今年四月滿洲國總理鄭蘇戡先生の來朝された時、老總理は少時を割いて特に博士を恭仁山莊に訪ひ經國の策を問はるゝや、博士は非常な熱意を以てその抱懷さるゝ理想と劃策とを述べて之に酬らられた事は、世人の耳目に尙新しい所であつて、以て博士の面目躍如たるを覺ゆる次第である。

かくの如く故内藤博士は夙に滿洲の事に興味を有つて研究し、之が對策を講じて倦む所なく、前後四十年、最後迄之と關係を結ばれた。言はゞ一生を滿洲の事に捧けられたのであつた。昭和九年六月二十六日溘焉として英靈天に昇られ、滿洲は遂に此の良き理解者、指導者を一

朝にして失つた事は、實に何ものにも換へ難い千載の遺恨と言ふべきである。唯今後は只管に故博士の遺業を繼承し之を發展せしむるこそ、余等後進の爲すべき責務であり、報恩と考へる次第である。

以上、故内藤博士と滿洲との關係の密接であつた事を述べ、特に歴史家として偉大なる功績を滿洲史、清朝史研究の上に殘された事、史料の蒐集に多大の勞苦を拂はれた事に就て略述したのであつた。然して當面の問題である蒙古源流の蒙古滿文の監寫眞作製に關しては、右の中に述べたやうに大なる苦心と努力が拂はれた事を知り得ると思ふ。さればこそ、昨年ヘーニシユ博士の新著出るや、故博士は直に之が批評をなし、意見を述べ、併せて蒙古源流に對する全般的の意見を表はさうとされたのであつたが、これ亦遂に種々の事情によつて實現されなかつた事は遺憾であると共に、余の怠慢にして其事を運び得なかつた事を改めて御詫びする。右記して些さか追悼の意を表する次第である。

○

さてヘーニシユ博士の字譯された滿文蒙古源流の原本は北平故宮所藏の刊本であるが、その刊本と同一のものを故内藤博士が奉天宮殿に於て夙に監寫眞にとられ、又同時に付印したと思はれる蒙古文のものをも監寫眞にとられた事は前に述べた通りである。既に述べた如く奉天に刊本蒙古源流の滿文と蒙文及び漢文と三體があり、北京に同じ刊本の滿文があるとすれば、北平の故宮にも刊本の蒙文や漢文の蒙古源流が藏せられたであらう事は當然考へ及ぶ所である。ヘーニシユ博士はその滿文の刊本だけを知り、同時に印行された筈の蒙文のものを見ない事を遺憾とされたが、それは目睹する機會を得ず、又之に就いて従來記録したものが無かつた爲に因る事であつて事實最近に至つて、確に北平故宮にも蒙文と漢文の蒙古源流の刊本即ち乾隆殿板の存する事が分明にされたのである。尙又前にも一言した如く、故内藤博士は明治三十九年に刊本滿文の蒙古源流の監寫眞をとられる傍ら、漢文刊本と、奉天文溯閣所藏の鈔本の漢文蒙古源流とを借覽して坊刻本を校合されたが、その鈔本の滿蒙漢三體の蒙

古源流も同じく北平故宮に存する事も明らかにされたので、左に蒙古源流の刊本鈔本に就いて一括して記述する事にしようと思ふ。換言すれば現在北平と奉天とは如何なる種類の蒙古源流が在るかと云ふ事に就いて記述するのであつて、その初めに、余の接受した報告に基いて記し、次に民國側に於ける記述に就いて述べる事にしよう。

一、北平故宮博物院圖書館所藏の分

蒙文 刊本 鈔本 各一部 (舊懋勤殿藏)

滿文 刊本 鈔本 各一部 (同)

漢文 乾隆四十二年殿板一部 (方略館藏)

右の外、端本として次のものあり。

蒙文 刊本五册 (方略館藏)

蒙滿漢文 鈔本各一册 (同)

右は昨年四月から北平に留學中の文學士山本守氏の調査報告によるものであつて、茲に附説して氏の勞を謝する次第である。

二、右圖書館舊藏にかゝり、現在南京に遷れる分

昨年の初、滿洲事變の餘波を受けて平津地方が多少動

北平奉天故宮所藏の蒙古源流に就いて

搖した時、張學良等は無謀にも北平故宮所藏の珍籍圖書名器等の一部を南京に遷してしまつた。其の南遷した圖書の部数は莫大なもので、今日、北平故宮博物院圖書館南遷書籍清冊といふ一冊の厚い目錄が作られて居る程である。かの楊守敬舊藏のものや、清史館に在つた貴重な記録文献の大部が同じ運命に會つた事は、余等として研究の便宜上からして、甚だ遺憾千萬と言ひたいのである。然しそれは兎に角、其の南遷書籍清冊の中に、

漢文蒙古源流 刊本、鈔本 各一部

の存する事が認められて居る。これは一に述べた蒙文滿文の刊本鈔本各一部に對應するものであつて、故宮に舊藏されたものである事は疑ない。

三、北平圖書館

珍籍收蔵の一として知られて居る北平圖書館に蒙古源流が存せぬかと云ふに、山本學士の報告によれば、滿文の藍寫真があるのみと云ふ事である。恐らくヘーニシユ博士使用の藍寫真と同時に作られたもので刊本の藍

寫眞と思はれる。

尙此の圖書館には熱河文津閣の圖書が移入されて居る筈であるが、それには蒙古源流は無いとの事である。

或は初め文津閣に存し、後に無くなつたかも知れないとも思はれる。

四、滿洲國奉天に現存の分

奉天現存の蒙古源流に就いては既に述べた如く、舊宮殿内、七間樓に藏せられて、今日は滿洲國立圖書館に移管された蒙滿漢三體の刊本蒙古源流各一部が存する事は確かである。これも明治三十八年には少くとも各二部存したが、一部は行衛を失し、今は各一部となつたものである。之に加へて文瀾閣には、漢文蒙古源流の鈔本一部が藏せられて居る。之を北平故宮所藏の分と併せ考へると、蒙文、滿文の鈔本各一部も存したらしいのであるが、既に明治三十九年故内藤博士が調査された時、その二書の函が空になつて居つたと言ふ事であるから、初め存して、何時か盗出されたのではないかと思ふ。或は鈔本の蒙文滿文は北京だけで奉天に迄

及ばなかつたのでないかと、思はれないでもないが、他所はいざ知らず、奉天だけは北京と同じく存置されたと考へたいのである。

以上蒙古源流に就いて現在北平に在り、又北平に舊存して南京に遷つたものと、奉天に現存のものに關して分明した所を列記したのであつて、専ら山本學士の報告と内藤博士の調査の結果によつたのであるが、この外他の四庫全書館に三體の鈔本が在つたか否か、若し在つたとすればそれは現在如何になつたか、又三體の刊本は他にも存するか否かに就いても調査すべきであるが、未だ調査が其所迄及んで居ないので、之には觸れずして、唯北平と奉天とに存するものに就いてのみ記した事をおことはりする次第である。

右に述ぶる如く北平及び奉天には、相當多數の蒙古源流の鈔本刊本が存する事が明らかになつたが、その北平所在のものに就ては既に今日迄二三記された事があり、前記の事と一致するが、蛇足乍ら次に附記したいと思ふ。

先づ集刊第二本第一分(民國十九年 月)に陳寅恪氏は吐蕃

釋奉贊普名號年代攷(蒙古源流)を載せられた中に(第三頁
照) (研究之一) (下段參)

蒙古源流滿文譯本。蒙古源流中文譯本非譯自蒙文。乃由滿文而轉譯者。今成袞札布進呈之蒙文原本。雖不可得見。(予近發見北平故宮博物院藏蒙古源流之蒙文本二種。一爲寫本。一爲刊本。瀋陽故宮博物館亦藏有蒙文本。蓋皆據成袞札布本鈔寫刊印者也) 幸景陽宮尙藏有滿文譯本。猶可據以校正中文譯本也。(下略)

と述べて居られる。之は蒙古源流に關して民國の學者の研究發表としては先鞭をなすものと思ふが、その漢文が原文の蒙文から直接譯されたものでなく、蒙文から先づ滿文に譯し、次いで滿文から漢譯されたものである事は故内藤博士が前述の監寫眞を得、又漢文の坊刻本を校合された時に早くも氣付かれた事であつて、從來余等の度々承つた所であつて、陳寅恪氏の言を俟つ迄もないのである。而して陳氏が北平故宮博物院で發見したといふ蒙文本二種は、前記一の項に示した舊懋勤殿藏の刊本鈔本各一部といふのに當るものと思ふ。又瀋陽故宮博物館の

北平奉天故宮所藏の蒙古源流に就いて

蒙文本といふのは、奉天宮殿に舊藏の蒙文刊本で、明治三十八年監寫眞にとられた所のものに當るのである。又、幸景陽宮尙藏有滿文譯本と言つて居るのは、やはり一の舊懋勤殿藏とある滿文の何れかを指すものと思はれる。成袞札布進呈之蒙文原本は果して如何になつて居るか、不可得見と言ふのは蓋し當を得た言であらうか。

右は陳寅恪氏の説に就いて一言したのであるが、其後民國に於ては格別之に關しての研究は出でず、唯最近に至つて二種の書目に蒙古源流を記したものがあるので、茲に舉げる事にする。其一つは昨年六月發行の國立北平宮博物院圖書館 滿文書籍聯合目錄であつて、九一四の門に、欽定蒙古源流 滿文〔平〕〔故〕

八冊八卷 刻本

〔故〕又藏鈔本。〔平〕從〔故〕藏刻本曬印本。

又藏蒙文鈔本刻本各一部。

と記して居る。之によれば故宮博物院圖書館に滿文と蒙文との刊本鈔本各一部を藏して居り、北平圖書館所藏の滿文は故宮所藏の滿文刊本の曬印本である事が明らかで

第十九卷 第四號 七五一

あつて、前に一、三、に記した所と正しく一致するのである。他の一は、昨夏八月印行された故宮殿本書庫現存目であつて、其中冊「志乘」の項に、

蒙古源流 八卷 乾隆四十二年譯刊、八冊

又 八卷 寫本八冊

とあり、同じく下冊「清文書目」の項には夫々滿文蒙文を以て、兩種の蒙古源流の存する事を記して居る。中冊志乘の項の記述は、共に漢文の刊本と鈔本とを言ふものであり、下冊清文書目の二書は恐らく刊本を指すものと思ふ。

然らば故宮に就いて、蒙文滿文の鈔本の所在は記して居らぬが、蒙滿漢三體の刊本の存する事は前項一に述べた所と一致して疑ひなく、而も漢文刊本が乾隆四十二年刊といふのは山本學士の報告と正しく吻合する。但し山本學士の報告に於ては漢文鈔本八冊の故宮存在を言つて居らず、それに相應するものは二の南遷書目の中に見られるに反し、是には故宮に鈔本八冊の存する事を言つて居るのは、疑はしいとも思はれるが、恐らく南遷した事を知らず舊によつてそのまゝに記したか、或は書目の出

來た後に南遷した(付印が先で南遷が後の義)ものであつて、山本學士の見落しではなかるべく、若し漢文の鈔本が二部あり、一部南遷し、一部残存したならば、何人も氣付く所であると思ふ。以上によつて民國側の記述目錄も、目的の差異によつて、必しも全般に互つたものとは言ひ得ぬが、大體に於て山本學士の調査報告と一致し、北平故宮には一部は南遷したとは云へ、要するに蒙古源流の蒙滿漢三文の鈔本刊本兩種が存したといふ事は確め得る次第である。

以上北平及び奉天の兩故宮に藏せられた所の蒙古源流の刊本と鈔本とに就いて現存の部数を記したが、右の刊本といふのは無論乾隆殿板で、北平本の中に乾隆四十二年殿本一部とあるのは之を證明するものであつて、それは獨り漢文のもののみでなく、蒙文滿文にも適用さるゝものとみてよからうと思ふ。又鈔本といふのは、奉天文溯閣の漢文鈔本から推して、其全部が四庫全書本である事は疑ないと思ふ。然らば右述の事を更に表示すれば、

北平故宮 蒙文 鈔本(四庫本) 刊本(乾隆殿板)各一部

滿文 同 同

漢文 鈔本(四庫本) 一部——南遷

刊本(乾隆殿板) 二部→一部南遷

奉 天 蒙文 刊本(乾隆殿板)

滿文 同 一部 國立圖書

漢文 同 同 館に移管

鈔本(四庫本) 同→文溯閣

となるわけであつて、尙初めには、奉天文溯閣にも蒙文

滿文の鈔本の存した事は疑なく、前に一言した通りであ

る。蓋し乾隆殿板即ち刊本に蒙滿漢文の三體ある以上、

鈔本即ち四庫本にも漢文の外、蒙滿二體の存したとみる

べきは當然の事で、而も北京に存した事が明らかである

限り、北京と同程度に清朝の尊重した奉天に存した事は

愈々確かさを加ふべく、現に空函となつて居るのは、盜

出の災に會つたもので本來存した事を示すものと解すべ

きである。

而して右に述べた外、前に表示した中に見える北平故

宮内の各種蒙古源流の端本は、何れも殿板或は四庫本の

端本とみるべきであつて、蒙滿漢文鈔本各一冊といふの

は、恐く圓明園或は熱河から搬入されたものでないかと

想像される。或は淨書の際の稿本の一部とでも言ふべき

ものかと考へられるが、實物に就いて察しなければ、何れ

であるか言明し難く、恐らく前者に従ふべきであらう。

實際に就いて考へるに、鈔本は數多い理由なく、各四庫

館に在つたとしても、それも北方の四閣だけで、南方の

三閣は果して如何か頗る疑はしい次第である。

次に多少内容に觸れる事であるが、鈔本(四庫本)と刊

本(乾隆四十二年殿板)とは、四庫全書館の設けられた年

次から推して、大體に於て殿板が先に作られ、後に鈔本の

出来たであらう事は見當付け得る。但し假りに殿板が凡

て乾隆四十二年としても、鈔本の作成は何年であるか、

之を明確に示す事は困難である。而も故内藤博士の研究

によれば、漢文の蒙古源流は、奉天宮殿七間樓舊藏の殿板

と文溯閣藏の鈔本との間に可成りの差異があると言ふ事

であるから、蒙文や滿文に於ても、兩種の間に差異ある事

も考へ得べく、又蒙文と滿文との間にも往々相違する所

があるらしいのである。それに就ては現に北平留學中の山本學士も私信に於て其事を報告して、「鈔本蒙文は刊本程省略なし」鈔本蒙文はシュミット本 (J. I. Schmidt: *Geschichte der Ost-Mongolien*……) に近く、刊本とシュミット本との中間に立つものならん」との意味の事を言はれ居り、且蒙文の方は一通り比較校合された由である。従つて滿文に於ても同様の事が想像され得べく、又蒙文より滿文に譯す場合に可成りの意を加へて改めた事は、最後の清朝に關係の記事の邊にて特に認められるのみならず、全般に互つて考へ及ぶ所であらう。その他喀喇沁本蒙古源流があり、その内容を異にする事もまた一考を要する所である。是等の點よりすれば、均しく蒙古源流とはいへ、其翻譯作成の順序、系統、異本に關して、又記述の内容について幾多考慮し研究しなければならぬ事がある。と考へる次第であつて、他日具さに研究の上高教を仰ぐつもりである。

○

以上冗漫に互つた嫌あるが、本來北平及び奉天兩故宮

並に四庫全書館に藏せられた所の蒙古源流の三體の鈔本と刊本とに就いて現存の狀況を述べた。然し之は單に報告であつて、決して研究といふ程の事ではなく、其の研究に關しては前言した如く他日の機會に譲りたく、又當面の事としてはヘーニシュ博士の新著の序文に述べられた事に關して紹介旁々批評しなければならぬのであるが之に就いては内藤博士の長逝に聯關して未だ稿を草するの運びに至らず、且近く奉天に於て蒙文と滿文との刊本蒙古源流を覆刻印行されると言ふ事であるから、これも待つた上で、詳しく研究して發表するの日あるを期したいと思ふ。故に本稿は甚だ内容の乏しい粗案な一文で汗顔赤面の至りにたへないが、夙に我が日本に蒙古源流の藍寫眞を始めその他種々の貴重な史料を將來された滿蒙史學界の大恩人である故内藤博士の英靈に對し、受業生の一人として些か追悼の意を表すべく、故博士と滿洲との關係を述べるに併せて、故博士が逸早く紹介された蒙古源流の北平及び奉天に於ける現存の狀況に就いて、少しく報告したものである事を、重ねて申して諸賢の御

諒察を希ふ次第である。

(昭和九年七月十五日、故内藤博士三七日追善供養の日、恭仁山莊にて稿了)

附記

余今夏北平旅行の時、北平圖書館を訪れ、其藏書目錄を閲した時漢文の蒙古源流に鈔本八冊の存する事を知り得たが、種々の事情により、之を閲覽するに及ばなかつたのは甚だ遺憾とする所である。鈔本といふのが果して何であるか、四庫本を意味するものか否か、これは確に興味ある事であつて、若し四庫本であるとすれば、熱河から移入されたものかとも考へられるが、之が調査は他日の機會に譲りたいと思ふ。前に記した所で疑問を付した點とも照應する所あるが、詳しくは後日に俟つ事としたい。(昭和九年八月三十一日附記)